（様式１）実践事例

学校名	二本松市立岳下小学校	校長名	七宮　成夫		
住　所	二本松市大壇１７５番地１	児童生徒数	２３６	学級数	１３
ＴＥＬ	0243 － 22 － 0269	ホームページアドレス	http://www.city.nihonmatsu.lg.jp/site/dakeshita-es/		

個に応じたきめ細かな指導による授業改善

１　少人数指導の計画

本校では，少人数教育にあたっては，児童の実態把握から，計画，指導体制，研修，授業改善を一連のものと考え，確かな学力の向上を目指し，個に応じたきめ細かな指導に取り組んでいる。

計画に基づくそれぞれの内容については，以下の通りである。

（１）児童の実態把握とそれに基づく計画，実践
- 各種調査（NRT，単元テスト，県学力調査，全国学力学習状況調査など）による課題の把握とそれに基づく学級プランの作成

（２）担任と担任外教員による共通理解と協力体制による指導
- 各種調査結果を基に，学年内での課題を共有し，担任と担任外教員で共通理解を図りながら必要に応じて一斉授業，Ｔ・Ｔによる授業など弾力的に指導にあたる。

（３）研修の充実（朝の学習の相互紹介，学級の課題を基にした研究授業，全国学力・学習状況調査の研修及び自校課題の共通理解，定着確認シートの活用）
- 定着確認シートの活用にあたっては，実施前に前年度の定着確認シートで復習をする。また，実施後，担任外の教員による集計をし，教員間でそれぞれの学年の実態について共通理解を図り，その後，担任と担任外教員の協力体制によりそれぞれの学級で補充指導を行う。

（４）個に応じたきめ細かな指導による授業改善
- 児童の学習意欲に基づく主体的な学習をめざした授業の展開
- 重点単元の教育課程への位置付けと単元における「話す」「聞く」「書く」「読む」活動のバランスを重視
- １単位時間における「伝え合う」活動の意図的設定
- １単位時間及び単元における「書く」活動の意図的設定
- 「思考力・判断力・表現力」の育成をめざし，子どもの問いを引き出す授業の構築
- 主に「思考力・判断力・表現力」を育む時間と，主に「習熟」に重きをおいた時間を意識した単元構想

特に，（４）に関する授業実践の概要については，以下の通りである。

２　実践の概要

「第６学年算数の実践『資料の調べ方』」…「資料のちらばり」

＜授業テーマ＞必要感をもって２つの資料を調べることができる授業

《方針①》児童の興味・関心や学ぶ意欲に基づく授業展開の推進（本時は発見型の構成）

《方針②》児童一人一人の発言の機会や学び合いによるコミュニケーション能力の育成

《方針③》児童一人一人がじっくりと思考する場の工夫

＜授業の実際＞

○　設定

じゃがいもを収穫し，肉じゃがをつくる。収穫量は１８個で２１６０ｇ。肉じゃがには，３６０ｇのじゃがいもを使う。A，B の袋には９個ずつ入っており，A の袋には平均１２０ｇに近いじゃがいも，B の袋は重さのちらばりの大きいじゃがいもが入っている。
学習課題「どちらの袋からじゃがいもを取ったら３６０ｇのじゃがいもを取りやすいと言えるか？」

○　展開

Ｔ：教師の発問等　　Ｃ：児童の反応	少人数指導を生かすための配慮（①②③は方針）
１　問題場面・学習課題を把握するとともに，解決の見通しをもつ。 Ｔ：「じゃがいもは，何個使えばよいですか？」 Ｃ：「１個の平均の重さは１２０ｇだから，３個使えそう。」	②　問題場面から必要な情報を取り出して整理し，解決していく糸口に気付くことができるようにした。
２　重さ調べをする。 （実際に，３人ずつ袋から重さが書かれたじゃがいものカードをひき，それぞれの袋から取り出した３個のじゃがいもの重さを計算する。ただし，A の袋は平均に集まっている袋，B の袋はちらばりが大きい袋。）	①　全員にカードを引かせることで，目の前の事象に主体的に関わることができるようにした。

C：「またＡの袋の方が３６０ｇに近いよ。」 C：「いつもＡの袋が，３６０ｇに近くなる。」 C：「Bの袋は，重さがばらばらになっているな。」 ＜カードを引く児童たち＞	①　袋から３枚ずつ取り出すごとに合計の重さを計算させることで，「１２０ｇの重さに近いじゃがいもがたくさん入っているとよいのではないか。」という問いを引き出した。 ①　児童のつぶやきを取り上げながら共有し，さらなる気付きを引き出すようにした。
３　結果をふまえ，学習課題について考える。 （１）自分の考えをノートにまとめる。 （「書く」言語活動） T：「どちらの袋からじゃがいもを取ると，３６０ｇのじゃがいもを取りやすいかな？」 T：「どちらか選び，その理由をノートに書きましょう。」	③　書く活動を取り入れることで漠然と見ていた目の前の結果を自分ならという問いに関わる「今の自分の考え」とともに，「自分がそう判断した根拠」を可視化させた。
（２）それぞれの考えを発表する。 （ノートに書いた理由を基にした「話し合い」の言語活動） C：「A。Aは集まっているけれど，Bは離れている。」 C：「A。Aは平均の近くに集まっているけれど，Bは平均の近くに集まっているわけではない。」 C：「平均が同じなら，どちらでもよいのではないか。組合わせしだいかな。」 ＜理由をノートに書く場面＞	②　児童の考えを発表させることで，多様な考えに気付かせるようにした。 ②　全体での話合いの中にペアでの伝え合い活動を取り入れ，自分の考えを伝えられるようにするとともに，互いの思考の共有を図った。
（３）数直線を用いて，ちらばりを調べる。 （ちらばり具合の可視化） T：「本当にＡの方は，集まっているかな。」 「では，実際に数直線に書き込んで調べてみましょう。」 C：「やっぱりＡの方が，１２０ｇの近くに集まっている。」 C：「Bは，こんなにばらばらなのか…。」 C：「数直線に表すと分かりやすいな…。」	①　児童が「ちらばり」に着目するよう（「ちらばり」への必要感が高まって）初めて数直線を提示した。

３　実践の成果と課題

○　個に応じたきめ細かな授業を実践するにあたっては，児童の実態把握から，計画，指導体制，研修，授業改善を一連のものと考え取り組むことで，学校全体として共通理解を図り，児童への指導を充実させることができた。

○　発見型の授業構成にして，児童の問いを「引き出すこと」「つなげること」を意識したことで，児童の思考を促したり，広げたり，深めたりすることができた。

○「問い」とそれを引き出す活動や「問い」の後に続く活動を吟味すること，また，少人数ならではのきめ細かな見取りを大切にすることで，児童が新たな数理を創り上げるような授業を展開することができた。

○　児童から出てきた考えを整理整頓するための言語活動として，書く活動や話し合う活動を取り入れ教師が個に応じて支援したことで，一人一人が目の前の事象に向き合い，目的意識をもって新たな考えを発見することができた。

●　話し合う活動において，児童の考えを十分に取り上げることができなかったこともあるので，取り上げたい児童の考えをしっかりと見取り，見極める研修が必要である。

●　今後さらに，本時のねらいを達成するために必要な「思考力・判断力・表現力」の明確化と，それにつなげる発問や活動の設定，さらに，それらを包括する場面設定が大切であることを感じた。そのために，数量や図形についての感覚を豊かにすること，さらに少人数指導を生かしてその感覚を活用する力を育んでおくことが必要であることを実感した。